

高温条件下でも収量、品質の低下が少ない水稲品種「さがびより」の育成

○広田雄二・徳田眞二・多々良泉¹⁾・吉田桂一郎・木下剛仁・松雪セツ子²⁾
(佐賀農業セ・¹⁾佐城農改・²⁾元佐賀農業セ)

【目的】

佐賀県の水稲の主力品種である「ヒノヒカリ」は、栽培しやすく、多収で食味が良いことから、平成9年には水稲全作付け面積の約半分を占めた。しかし、平成11年以降「ヒノヒカリ」は、地球温暖化による登熟期間の高温の影響で、収量や外観品質の低下が問題となり、高温条件でも収量、品質の安定した良食味品種の育成が要望されていた。そこで、高温条件下でも収量、品質の低下が少なく、極良食味の「さがびより」を育成したので、その特性を報告する。

【来歴および育成経過】

「さがびより」は、1998年に佐賀県農業試験研究センターにおいて、中生で良質・極良食味・多収を目標に、「佐賀27号(後の「天使の詩」)」を母、「愛知100号(後の「あいちのかおりSBL」)」を父として人工交配を行った組合せに由来する。初期世代は集団育種法で世代を進め、2000年のF₄世代で個体選抜を行い、以後、系統育種法により選抜・固定を図った。2002年(F₆)に「さ系714」の系統番号で生産力検定試験及び特性検定試験に供試し、2004年からは「佐賀37号」の系統名で奨励品種決定基本調査に、2006年からは現地調査に供試し、地域適応性を検討した。その結果、2009年3月に佐賀県の奨励品種に採用された。

【主要特性】

「ヒノヒカリ」と比較して、稈長は6 cm短く、穂長はほぼ同等、穂数は同等かやや少なく、草型は“偏穂重型”である。生育中の葉色はやや濃く、止葉は「ヒノヒカリ」よりやや伏す。籾は少程度の短芒を有し、粒着密度は「ヒノヒカリ」よりやや密である。

出穂期は「ヒノヒカリ」より5日、成熟期は3日遅く、“中生の晩”に属する。耐倒伏性は「ヒノヒカリ」より優れる“やや強”で、脱粒性は“難”，穂発芽性は“やや易”である。葉いもち及び穂いもち圃場抵抗性は“弱”と“やや弱”，白葉枯抵抗性は“やや弱”である。縞葉枯病に対しては罹病性である。

玄米の形状は中粒中形で、「ヒノヒカリ」と比べ

長さはほぼ同等であるが、幅がやや広く、厚さがやや厚い。玄米千粒重は「ヒノヒカリ」より1 g程度重く、外観品質は優れる。登熟期間が高温でも、外観品質の低下は少ない。収量は「ヒノヒカリ」より10%以上多収である。

炊飯米は光沢があり、粘りが強く、食味は「ヒノヒカリ」と同等か良い。

【栽培上の留意点】

いもち病、白葉枯病に弱いので、適宜防除に留意する。

表1 「さがびより」の特性概要

品 種 名	さがびより	ヒノヒカリ
早 晩 生	中生の晩	中生の中
草 型	偏穂重型	偏穂重型
出穂期(月・日)	8.31	8.26
成熟期(月・日)	10.10	10.07
稈長(cm)	73	79
穂長(cm)	19.0	18.8
穂数(本/m ²)	357	372
芒の多少・長短	少・中	稀・短
ふ先色	黄白	黄白
脱粒性	難	難
耐倒伏性	やや強	やや弱
穂発芽性	やや易	難
葉いもち	弱	やや弱
穂いもち	やや弱	やや弱
白葉枯病	やや弱	やや弱
縞葉枯病	罹病性	罹病性
玄米重(kg/a)	52.1	45.9
同上標準比率(%)	115	(100)
玄米千粒重(g)	22.4	21.5
タンパク質(%)	7.5	8.1
玄米外観品質	上上	中上
検査等級	2等上～中	3等上
食味	上上	上下

- 注) 1. 数値は、2002～2008年(2006年除く)の平均値。
2. 施肥量(窒素成分)は10.5kg/10aである。
3. 玄米外観品質及び食味は上上～下の9段階で示した。
4. タンパク質含有率は玄米で、調査年次は2004～2008年(2006年除)である。

表2 登熟温度と白未熟粒割合

品種名	検定年			平均
	2005年	2006年	2007年	
さがびより	14.9(26.5)	3.1(26.9)	3.2(27.2)	7.0
ヒノヒカリ	11.2(26.9)	37.0(27.9)	26.7(28.2)	25.0

- 注) 1. 移植は5月中～下旬である。
2. ()内数値は出穂後20日間の平均気温(℃)を示す。

表3 食味官能評価((財)日本穀物検定協会依頼)

調査年	外観	香り	味	粘り	硬さ	総合評価
2005	0.50	0.00	0.40	0.10	0.25	0.60
2007	0.30	0.05	0.55	0.45	0.15	0.55
2008	0.55	0.10	0.65	0.35	-0.05	0.65

- 注) 1. サンプルは佐賀農業センター奨励品種決定調査の標肥区産である。
2. 基準は複数産地産コシヒカリのブレンド米である。